

タイトル…淡泊だと思つてた恋人とお酒に酔つた勢いで
伊つても伊つてもやめてくれない濃厚意地悪えっち

●奥森 裕太(オクモリ ユウタ)

落ち着いた雰囲気で、頼りになるお兄さんのような性格。
普段はあまり口数が多くなく、感情を表に出すことはしないが、
聞き上手で面倒見も良いので職場でも頼りにされている。

あなたとは大学の先輩後輩で、

普段は口に出さないがとても可愛いと思っている。

本当はイチヤイチヤしたいし、スキンシップ也多めに取りたいと思っているが
あなたを困らせるのも嫌なので口には出さない。

お酒に弱く、量もそんなに飲めないが、飲んでも記憶はなくさないタイプ。

●あなた

大学の先輩だった裕太と付き合い始めてから、
優しく頼りになる裕太のことが大好き。

もつと愛情表現をしてほしいと密かに思っている。

二十歳になってすぐの週末。あなたは初めてお酒を飲むことにした。
彼氏の裕太が用意してくれた甘いお酒を自宅で楽しんでいるうちに…
なんだか裕太の様子がおかしくなってくる。

「可愛いな……」

普段、可愛いとか好きだなんてめったに言わないはずなのに。
どうやら酔いが回ってきているらしい。

裕太はあなたを抱き寄せ深いキスをし、服の中へ手を滑り込ませた――

「へえ……キスだけでこんな濡らしたんだ」

アルコールで軽く火照った体は、簡単に反応してしまう……

普段は淡泊で穏やかな彼からは想像もつかない、
意地悪で甘々な濃厚セックスが始まる。

【トラック1】

タイトル…お酒って思ってたより美味しいんだね

場所…裕太の家（夜）

※お酒を飲みながら談笑する二人。

「どう？ 初めてのお酒の味は」

※主人公「思ってたより飲みやすいし美味しいかも」

「よかった、この種類は甘くて飲みやすいんだよな。
最初だから、ジュース感覚で飲めるものがいいかと思って買ってきたけど、
正解だったな」

※主人公「ありがとう」

「あ、飲みやすいって言っても一応アルコールは入ってるから。
あんまり飲みすぎるなよ？
あとで気分悪くなったりしたら、シャレになんないからな」

※ビニール袋からペットボトルを出しテーブルに置く裕太。

「ほら、ちゃんと水も飲めよ。
どれだけアルコールに耐性あるかわかんないんだから。無理厳禁、な」

「ほら、こっち向いて？」

※主人公が裕太を見る

「んー、顔色は変わってないな……赤くもなっていないし。
ひよっとして、酒強いタイプなのかも。
まあ、あとから一気に回る可能性もあるし、油断禁物だけど」

※主人公「心配しすぎだよ」

「心配して当然。お酒デビューなんだから、
家でゆっくり自分の体と相談しながら飲んでみるのがいいんだって。」

「俺、自分が飲み始めたばかりの頃は、何回か外で飲んで失敗したから……
気をつけたほうがいいって、酒の怖さを身に染みて感じたんだよ」

※主人公「そうなの？ 裕太くん、今はお酒飲まないのに」

「そうそう。」

色んな失敗を経て『飲まなくてもいいな』って結論に達して
飲まなくなったんだよ。

元々酒が好きってわけじゃなかったし。」

「仕事帰りに、付き合いで一杯飲めば充分。
家に帰ってからは映画見たり本読んだり、やりたいことも色々あるしさ。
酒飲む時間があるなら、そっちに回したいんだよ」

「ふう…。正直こんなに飲んだの久しぶり……
ちびちび飲んでたけど、もう一時間くらい経ってるもんな」

※主人公「付き合ってくれてありがとう」

「いいよ、彼女の初飲みに付き合えて嬉しいし……
俺はちよつとだけ熱くなってきたけど。お前は大丈夫？」

※主人公「え？ うん、平気。美味しいよ」

「すごいじゃん。もう結構飲んだのに……ザルの可能性があるのかもな」

※新しい酎ハイを開ける主人公。

「……ん、可愛いな、お前」

※主人公「えっ!？」

「今、嬉しそうに缶を開けてる顔、めちやくちや可愛かった……」

※主人公「けほっ、けほっ。ど、どうしたの急に」

「どうしたって…思ったから言っただけじゃん。
何、むせるほど驚いた？ほんと、可愛い」

「はあ、めっちゃいい匂いする……
でも、嬉しそうな顔するならこっち向いてほしいんだけど?」

※主人公「んっ、どうしたの……」

「なんでそんなに動揺してんの？ 大丈夫か？」

「ちゅ、ちゅっちゅ。」

ちゅくつ……はふ、ん、ああ、口の中アルコールの味してる。
キスただけで酔いそうになる…」

「ふっ……なんか、久しぶりにキスしたかもな。」

ん、ああ、顔には出てなくても目はちよつと赤くなって潤んでる……
可愛い。あと、エロ……」

※主人公「ゆ、裕太くん、結構酔ってる？」

「いや？ 酔ってないけど。」

一本空けただけだし、ちよつと頭ぼーつとしてるくらい。
酔ってるように見える？」

※主人公「少しだけ……普段可愛いとか言わないし」

「お前のことは、普段から可愛いと思ってるよ。」

けど……可愛いって言っても『そんなことない』って否定してばかりだから、
あえて言わないだけ……酒の力を借りて言ったわけじゃない」

「ね。だから、『そんなことない』じゃなくて、『ありがとう』って言って？
……可愛い」

※主人公「あ、ありがとう」

「ほら、めちやくちや可愛い……」

※主人公「お水持って来るね」

※動揺した主人公を抱きしめる裕太。

「どこいくの？ ……だめ、離さない」

【トラック2】

タイトル…絶対酔ってる！ 絶対正気じゃない！

場所…裕太の家（夜）

※1の続き。裕太に抱きしめられた主人公。

「あー、心臓の音めちゃくちゃ伝わってくる。俺までドキドキしそう」

※主人公「裕太くん、ちょっと待って」

「だめ、待てない……離したらどっか行くだろ？
だったら絶対離したくないんだけど……」

「ふっ、固まっちゃった？ 心臓すげえ速いし……
抱きしめるのなんて初めてでもないのに、何その可愛い反応。
ますます離したくなるじゃん」

※主人公「だって、裕太くんがいつもと違うから……」

「そう？ 俺はいつも通りだけど」

※主人公「でも、可愛いとかも、普段全然言わないのに……」

「だからさっきも言っただろ。
言わないだけでいつも可愛いって思ってる、って。」

「可愛くてしょうがなくて、めちゃくちゃにしたいってずっと考えてた」

※主人公を押し倒す裕太。

「あーあ、押し倒されちゃった……
でも、可愛い顔してるほうが悪いんだからな？
俺のこと、刺激しまくって……何もないなんてあり得ないだろ」

「ん、口、開けて……舌絡ませたい。

ん、ちゅ、ちゅく……はふ、ん、はあ、もっと舌出せるっ」

「ん、ふっ、上手……ちゅ、口人中、あっつい……甘いな。
もっと舌伸ばして、そのままにしとけよ……」

※主人公「あ、ふっ、やあ……ん、んう……っ」

「ふ、嫌って言いながら、必死に突き出してるじゃん……
舌べろべろ舐められて吸われるの気持ちいい？」

「だらしねえ顔して……すげー喰る……ぢゅる、ちゅ、ちゅぽっ、じゅるるるっ」

「お前の舌、頬張ってジュルジュル吸って舐めまわしてやろうな……
ん、ふっ、なんだかつ、ペロをしごいてるみたいで……
めちやくちやエロい……はあ、はあ、ん」

「はあ、はあっ、体くねくねさせて……もうこっちも我慢できない？」

※主人公「え？」

「とぼけたってダメ。こっちって言ったら、下に決まってるだろ。
さっきから腰も動いてるし、太ももにも力入ってたよな？
気づかないとでも思った？」

※主人公の性器を下着の上から撫でる裕太。

「下着の上からでも、めちやくちや熱くなってるのわかるよ。
ほら、軽く触っただけでクチュって音してる……段々しつとりしてきた。
この中に指入れたら、どうなっちゃうんだろうな？」

「あー、さっきまで何もなかったのに、
急にコリコリってして、指に当たるようになったじゃん。」

「どんどん固くなってきてる……」

ああ、指でこねると腰ビクンって浮いちゃうんだ？」

「ここ、なんだか俺に教えてくれる？」

※主人公「それは……んあっ♡」

「言えない？ 知らない、なんてことはないよな？」

「ああ、ほら、喋りながらしごいてるうちに、ぷっくり膨らんできた……
もう下着越しでも一発でわかるくらい大きく勃っちゃったな……」

「これ、クリなんだろう？」

触られただけで、感じて大きくなっちゃったんだもんな？」

※主人公「だ、だめえ」

「こら、足バタつかせるなって。危ないだろ」

「ああ、そっか……下着の上からじゃなくて、
直接触ってほしくて駄々こねてるんだ？ 気づかなくてごめんな。」

「こんなじれったい触り方じゃ、余計に興奮しちゃうもんなあ？」

「服も下着も全部脱いで。下着びしょ濡れにたくないだろ？
ほら——」

※主人公の服と下着を脱がせる裕太。

「ああ……すご、足開いただけでクチュって音出てるじゃん。
服脱がされて、足M字に開かれて余計に興奮したんだろ？
やらし……」

「はあ、ああ、足がぱっかり開いてるから、割れ目の奥までよく見えてる。
トロットロだな」

「キスだけでこんな濡らしたんだ。
結構感じやすいよな……そのうちキスだけでイけるようになるかもな」

「ふーっ、めちやくちやエロくて甘い匂いしてる……
すっご、外まで愛液溢れてきてるよ。」

「顔近づけただけで、割れ目がヒクヒクしてる……」

「物欲しそうに見えるけど、何してほしいんだよ？
ヒクつかせてるだけじゃわかんないだろ」

※主人公「やっぱり酔ってるでしょ!! いつもこんなことしないのに……」

「だから酔ってないって。
やらなかっただけでずっとやりてえなって思ってたんだよ。」

「このクリとか、本当はもっといっぱいいじめたくてしょうがなかったし……
こんなふうに……ん、ちゅ」

※主人公「ひゃっ！ う、うそ、あ……っ、な、舐めるの、だめっ」

//SE：体をよじる衣擦れ

「嘘じゃねえって。この身体いっぱい虐めて、
気持ちいいって泣かせる妄想して毎日オナつてたんだから。」

「でも……恋人なのに我慢するのも変な話だよな？」

※主人公「ま、待って、あつ、やだ」

「待たないよ。恋人なんだから、
一緒に気持ちよくなることとしてもおかしいことなんてないのにな？」

「だから今日はたくさんいじめさせろよ……ん、ちゅ、ちゅく。
ほら、割れ目に舌ねじ込んでっ、
端から端まで、割れ目舐め回してやる、からっ……!」

※主人公「酔いすぎだよおっ」

「酔ってたらっ、こんなに正確に割れ目なぞって舐められないって。
ん、ちゅく、ちゅつちゅ……はあ、顔、めちやくちやスケベになってるぞ。」

「俺の顔が足の間に埋もれてるの見て、発情してんだろ？
そのまま、舐め回されてるとこ、ちゃーんと見とけよ…」

「ああ、やっぱりクリ大きくなってる……
舐め回してくれって言ってるみたいじゃん。」

「根元から先っぱまで、ねっとり舌で舐め上げてやらなきゃな。
何度も何度も……クリが限界になるまで、やめてやらねー」

「ちよっと舐めただけなのに、もうびんびんに硬くなってきた……。」

「ここで射精できるわけでもないのに勃起して、
気持ちいいですっって必死にアピールしてんの、
えっちいいな……れろ……ちゅう」

※主人公「やつ、やだっ」

「何がやだ？
ぺろぺろ舐めるたび嬉しそうにクリトリスぴくぴくしてるじゃん……
ほら、舌先でやさしく撫でてやると……れろっ、れろれろれろっ」

「はあ、はあ……ここ、弱いんだよな。知ってる。」

「たまーに指で少し撫でてやると、それだけで顔真っ赤にして嫌がるから、いつもすげー興奮してたんだ。」

「本当はそのまま摘んでくにくに押し潰したり、カリカリ引つ掻いたり転がしたりして、よがりまくる姿見たかったけど……我慢してたんだよ」

「今日は、沢山いじってやるからな……」

「ん。こうやってやだやだ泣きじゃくるお前のクリ虐め続けたら、どんなふうに乱れるんだろってずっと考えてたけど……本物はやつぱくるな……ぢゅ、ぢゅう……ッ」

※主人公「あああゝゝ♡」

「裏筋ぐりぐりされるのもいいんだ……声とろけてんのエロ……もつとクリいじめてやるから、いっぱいイけよ……」

「裏筋もつ、勃起したクリの先っぽもつ、舐め回すぞっ……!」

※逃げようと腰を動かす主人公。

「こら、逃げんなっ……腰、がっしり掴まないとダメか？ほらっ、押さえつけたままっ、クリ思いつきりしゃぶってやろうなっ」

※主人公「それっ、だめええっ♡イクうつ♡」

「んゝ？ グリグリ舌で転がされんの、そんないいの？」

「はっ、はっ、しゃぶりながらっ、舌で舐め回してやるよっ、ぢゅ、何、もうイった？ すっげえ声……ぢゅゝ……っふは。」

「いっぱい舐められてぷっくり充血してるクリ、可愛くて美味そう……んむ」

※主人公「んーっ♡」

「クリ噛まれるの、声も出ないくらい気持ちいいわけ？そーいう反応、すげえ唆られる……」

「こりこりしながら敏感クリいっぱい舐めてやるからな……ん。
クリ虐められて何回もイっちゃまえ……」

※主人公「なんかきちゃうつ♡」

「ん？ 何がきちゃうんだよっ？
腰ガクガク浮かせながらっ、スケベ声出してるお前がどうなるのか見たいっ…
見せろよっ…！」

※主人公、絶頂する。

「んんっ、はーっ、はっ……気持ちよくなりすぎて潮吹きちゃうんだ？
何それ、エロすぎて最高なんだけど……」

※主人公「し、しお……？」

「潮、知らない？ 気持ちよすぎると出ちゃうやつ。
へえ、これが初めての潮吹きなんだ。そうだよな……」

「いつもエッチなことなんて何にも興味ありませんって感じだもんな……
なのにこんなエロく潮吹きしちゃったんだ……」

「イヤイヤ言いながら我慢できないで……あー、やば、マジでチンポ痛え」

「ほんと、スケベな顔するし……なんなんだよ」

「はあ、はあ、顔、トロトロになってるぞ」

※主人公「もう今日はおしまいにしよ……？」

「何言ってるんだよ、まだクリしか弄ってねえのに終わるわけないだろ。」

「四つん這いになってお尻こっち向けて……
ちやーんと、割れ目の奥が見えるようにしろよ？ 腰落したらだめだからな」

「これからが本番だろ……
あー、もつとエロい顔見られるって思うと……たまらないわ」

【トラック3】

タイトル：「腰ふりふりしておねだりしてるようにしか見えねえんだけど」

場所：裕太の家（夜）

※四つん這いの体勢になった主人公。主人公のうしろにいる裕太。

「エロ……太ももまで愛液垂れてるけど。」

四つん這いになって、おまんこ見られて…やらしいな……」

「あー、割れ目もめちやくちやヒクついてる……」

※主人公「恥ずかし……」

「ん？ 恥ずかしいわりに、すっげー濡れてるじゃん。」

「ほら、おまんこの外までびしょ濡れ……ふっ、ゾクゾクしてんの？
見られて興奮するなんて、スケベすぎ」

「お前のお尻ってほんとエロいよな……」

「掃除とかしてるときに四つん這いになってたりすると、
このままバックで犯してえなっっていつもムラムラしてたの、知らないだろ……
はあ、あんまヒクつかせんなって……」

「ふーっ、おまんこキュンキュンしてるんだ？
もっとなめておねだりしてて、可愛いな。」

「さっきみたいに、顔うずめて舐め回してほしくて……
ウズウズしてるんじゃないの？」

※主人公「ち、ちが……」

「声、ちゃんと出てないけど？
腰振って、舐めてくださいって言ってるようなもんじゃん。
それじゃ、いただきます——」

「あー、とろとろおまんこうっま……
さっきの酒なんかより全然こっちのほうが好きだわ……ちゅ、ちゅう。」

「エロい味。ここもどんな味するんだろってずっと想像してたけど、

想像よりずっと美味い……はぁ、ナカもつと舐めさせてよ。」

「舌差し込んで、ベロベロ舐め回してあげる」

※主人公「ああ……っ♡」

「おまんこ、くぱあって開かれて、唇べったりつけて舐め回されてるよ。どんな気分？」

※主人公「恥ずかし……」

「恥ずかしいのにつ、こんなにトロトロになってんの？俺に舐めてほしくて溢れさせてるんでしょ？」

※腕の力がなくなりつんのめる主人公。

「おっと、腕の力抜けちゃった？ 顔はぶつけてない？」

※主人公「だいじょぶ……」

「じゃ、遠慮なく続けさせてもらおっかな。」

「お尻だけ高く上がって、こっちに突き出すみたいなポーズになってんの……余計エロくなっちゃってるし。」

「動けないところを無理やり好き放題してるみたいで、興奮する……」

「ふー、ふーっ、もつと舌入れて中まで舐めさせて」

「あー、スッゲー声。」

エロい喘ぎ声だけで、チンポ爆発しそうなんだけど……」

※主人公「言わないでえっ♡」

「ん〜？ 言われて興奮してるくせに……あーあー、おまんこびしょ濡れ。ナカ、舐めても舐めても愛液溢れてくるじゃん……」

「ここの浅いところ擦られんの弱い？ 足の指がぎゅうっつてなってるな」

「やだやだ体よじってるの、腰ふりふりしておねだりしてるようにしか見えねえんだけど」

※主人公「違う……っ♡」

「……ああ、なるほど。舐めるんじゃないくて、もう挿れてって意味？
ほんっと、欲しがりだなあ。」

「あー、挿れるって言った瞬間、おまんこのヒクつき度合い一気に増したけど。
やらし……もう一回聞こつか？」

「ドスケベおまんこに、挿れてほしいの？」

※主人公「ダ、ダメ、今挿れたらっ」

「今挿れたらおかしくなっちゃう？　じゃ、どうなっちゃうのか見せてよ。
今すぐ、ギンギンの勃起チンポ挿れてやるから」

※服と下着を脱ぐ裕太。

「はーっ、はーっ、ああ、脱いだけで、チンポぶるんって根元から揺れてる……」

「早く中に入りたくてうずうずしてるのわかる？
さっさと脱いどきやよかつたな。」

「お待たせ。やーっど欲しがりおまんこに入るぞ」

※主人公の性器にあてがう裕太。

「んお、すげ……熱……はあ、ああ、おっ、欲しがってるじゃんっ……くっ」

※バックの体勢で挿入する裕太。

「はあ、やっべー締めつけ……」

チンポが欲しくてやだやだ言ってたんだから大歓迎も領けるけど……」

「これは悦びすぎ。何、もしかして挿れられただけでイった？
おまんこすげえうねってんだけど……」

※主人公「揺らさないでえ……♡」

「んんっ、揺らされるのがっ、いいんだ？」

「中っ、ゾリゾリって擦りながらっ、開かれるのたまんないんだろっ？
中につ、馴染ませるみたいに軽く揺さぶってあげるからさっ！」

「ああ、もう喘いでんの？」

ほらっ、チンポ軽く出し入れするだけでっ、子犬みたいな声出てるっ。」

「はあっ、んあっ、俺をどれだけ興奮させれば気が済むんだよっ。

奥まで、甘々になつて痺れちゃった？」

「背中反らしてよがつてるとこ見下ろすの、たまんねーな……

動物の交尾みたいにバックで犯されるのはどう？」

※主人公「や、だあっ」

「俺はすげえいい気分……征服欲って言うの？」

ようやく俺のものにできた気がして、すげーぞくぞくする……」

「こんな気持ち、初めて。あー、ヤバ、俺どうにかなりそうなんだけどっ

変なんだよ。

大事にしたいって思う気持ちとおんなじくらい、酷いこととして、
気持ちいいって泣かせてやりたかった、こうやって……」

//SE：ピストン音・激しくなる

「っはあ、最高……っ。今日は全力で犯すから……

やだやだ言いながら、いっぱいイくところ見せて」

「せっまいナカ無理やり押し広げてうしろから犯すの、すっげーいいっ……！」

「お尻側のGスポもちゃんといじめてやるからなっ？」

「こゝ、だろっ？ ほらっ！ ぐちゃぐちゃにしてやるっ………！」

※主人公「ああっ、激しいっ♡」

「激しいのっ、好きなくせにっ……！

体の隅から隅まで俺のものにされていくの、しっかり感じろよっ……」

「逃がさねえよ、腰掴んでっ、入り口から奥まで出し入れしまくってっ、
俺の体温も形もっ、覚え込ませてやるからなっ………！」

「はっ、はっ、ああ、スッゲ……中、うねってるっ………！」

「乱暴にされてっ、意地悪言われながら犯されてるのにつ、

こんなにスケベな反応見せてくれるんだ？」

「お前がっ、こんなにっ、エロくてセックス大好きだったなんてっ、知らなかった」

「なあ、『チンポすごい』『スケベなセックス大好きです』って言うて？」

※主人公「や、だあッ、無理っ」

「無理じゃない、だろっ！

お前が感じてることなんだからっ、素直に口に出せばいいんだって…！」

※主人公「だめっ、チンポすごい！ スケベなセックス大好きですっ♡」

「ん、おおっ！ チンポにクルっ…！ ちゃんとっ、言えるじゃんっ…」

ああ、可愛い…めちゃくちゃ可愛いっ…！」

「奥までっ、届いてっ、気持ちいいところっ、コリコリって擦れてる、だろっ！」

「はあ、ああ、まだイイイヤ首振ってんのっ？

本当はっ、気持ちいいくせにっ…！」

「はあ、んあっ、俺がめちゃくちゃ興奮してチンポ固くしてるの感じながらっ、もっと発情してるんだよなあっ？」

※主人公「そんなことないっ♡」

「そんなことないって、まだ抵抗すんの？

いつもよりも気持ちよさそうに喘いでんの、自分でも分かってるだろ？」

「おまんこ差し出すポーズさせられて、ずっぱり啜えこんで悦んじやって、ひどいことされて感じちゃうタイプなんだって認めるよ」

※主人公「違う、私こんなの好きじゃ——」

「好きじゃない？嘘ついてんじゃねえよ。お尻、鷲掴みにして広げられてるのにつ、嬉しそうに中ヒクついてるじゃん。ほら——」

※主人公のお尻を軽くぺちぺちと叩く裕太。

「ほらっ、ほらっ、ほらほらほらっ……」

あー、軽くお尻叩かれるだけでっ、気持ちよさそうな声上げちゃってっ。「」

「恥ずかしくてしょうがないくせに、気持ちいいんだろ？
さつきよりっ、感度めちやくちや上がってるじゃん」

「あー、お尻揉みほぐされてっ、叩かれて、広げられて、
お尻の穴まで見られちゃってるのにつ、嬉しそうに喘ぎまくって……」

「ほんと、ドスケベだなあっ？」

「知らなかったよ、俺の可愛い彼女がこんなにエロくて欲しがりだったなんて。」

「奥までジュポジュポ出し入れされながらっ、
お尻触られて嬉しくなっちゃってるんだろ？」

「やらしーことに興味ありませんって顔して、
こんな変態だったんだ。マジで騙された……」

「これからは遠慮なくこのまんこたくさん犯してやるからなっ……！
奥までっ、ズッポリ入れてっ、グリグリってっ、先っぽ中に擦りつけなきゃなっ」

「お尻もみくちやにされながらおまんこ犯されて、気持ちよくなってる姿……
すげえ可愛い……っ、あゝやべー、すぐイきそう……！」

※前に体を動かそうとする主人公。

「何逃げようとしてんだ、よ……っ！」

※主人公「うあっ♡ もうっ、イク、イッちやうっ」

「ん、イキそうなのにつ、気持ちいいの逃がそうとするなよっ……！
わけわかんなくなるまでっ、突き上げてやるんだからっ……」

「逃げんなっ。」

腰掴んでっ、一番奥を何度も何度も擦ってやる、からなっ！」

「俺もナカに出してやる……！ イけ、イけ……！ エロい声上げて絶頂しろっ！」

※主人公「う、あ、あああっ！」

「くっ、あ、あああっ！ 締まるっ……俺もっ、出るっ、
くうっ、あっ、イク！ んああああっ！」

「はあっ、はあっ、んあ、脈打ってるっ……」

くっ、ああ、止まんね……めちやくちや精子出てる……」

「ふーっ、ふーっ、これ、奥に塗りつけてやらないと、なっ」

「っはー、腰止まんねえ……とろとろまんこ、

吸いついて全然離してくれないんだけど、いやらしすぎねえ？」

※主人公「やだやだっ、イッたばかりだからあっ♡」

「いいんだろっ？」

イッたばっかのおまんこ、ぐちゅぐちゅかき回されるのっ、

嬉しくて仕方ないくせに。イキすぎて辛いつてだけじゃないだろ？」

「こんなに体びくびくさせて悦んでる…

…ほら、今度は子宮口いっぱいいじめられていくとこ見せて」

※主人公「無理、もうイきたくない！」

「嘘つくなよ。おまんこはまだイキたいって言ってるぞ？

気持ちよくなりたいって甘えんぼしてるよ」

※主人公「無理いっ」

「あー、こっち向いてまで、泣きべそ顔見せてくれんの？ 顔ぐしやぐしや。

そんな泣くなつて……もつといじめたくなるだけなんだから……」

「あーっ……体っ、ぴったりくっつけてっ、一番奥、集中狙いしような？」

「ふっ、んん、お前の中がっ、いやらしくチンポマッサージしてくれたからっ、

あっという間に元気になったよ……」

「やっぱり、もっと突き上げてっっておねだりしてるんだろっ……！」

「子宮口キスしてるだけなのに体すげー震えてる……

そんなにここ気持ちいいんだ？」

「ん、ふっ、はあ、おおっ。

腰っ、押し付けてグリグリ回すのっ、スッゲ……一気に締め付け強くなった……」

「はーっ、んあっ！ まだまだっ、頑張れるじゃんっ」

※主人公「ダメエ！ 頭馬鹿になっちゃう……♡」

「ん、馬鹿になっちゃいそ？」

いいね、俺はそれが見たいんだから、止めるわけないだろ？」

「見せてよ、頭馬鹿になって、

中出しされることしか考えられなくなってる顔……！」

「ああ、そうだ。子宮口ゆっくり揺らしながら、

虐めてあげようか……ここ、コネコネさんの大好きだもんな？」

※主人公のクリトリスに触れる裕太。

「んは、すっげ、クリ超勃起してるっ……！ パンッパンじゃん。

今にも破裂しそ。指でこねまわしてシコろうか？ こんな、ふうにつ……！」

※主人公「だめっだめ……ッ！」

「あー、いい声……！ ハメながらクリいじったこともなかったもんな。」

「嬉しそうにまんこうねらせちゃって……そんな気持ちいい？

クリナデナデしてるだけなのに」

「だめだめって言われたら、意地悪するに決まってるだろ。

ぼつてり腫れちゃった敏感クリ、いっぱいいいじめられて気持ちよくなれよ……」

「あー、ヤバ、ヌルヌルになってんのに、摘まめるくらい勃起してる……

ぎゅーって摘まむと、腰ビクンって跳ねるのエッロ……」

「じゃ、裏筋もカリカリって引っ掻いてあげような。」

「おおっ、あつは、締まるっ！ チンポキュウキュウ締め付けすぎだって……！

先っぽっ、子宮口にべったりくっつけて、何度もオチンポキスしよつか。」

「ほら、ちゅ、ちゅって……うああ、スゲ、くっ……！」

「何、子宮もクリもぞわぞわしてんの？ 両方気持ちよくなってんでしょ。」

「奥も外も同時にもみくちゃにされてるのにつ、

背中のか反らせて、体震わせまくってるもんなっ……」

※主人公「またイっちゃうう♡」

「ふ、もうずっとイキっぱなしな気もするけど……いいよ、クリとまんこ両方でイケよ、ほら……イケイケ、イケ……！」

※主人公「イク！ イクイクイクっ！ んああああっ！」

※絶頂し、潮吹きする主人公。

「おおっ、くっ……また潮吹きしてるっ……
クリいじめられてっ、おもらしすんのスケベすぎ……！」

「まだ終わってない、からなっ。
ちゃんとイケてえらかったねって、ナデナデ終わってないしっ……」

※主人公「は、ああ……んうっ♡」

「ちょっと撫でられるだけで甘イキ？ すっかり淫乱クリになったな……
ここだけで何回もイツちやう姿、すげー可愛いっ」

※主人公「ナデナデしないで……気持ちいいの、終わんない、からあ」

「はあ、ああ、ごめんごめんっ。じゃ、これが最後、なっ！」

「はっ、はっ、ん、くっ……クリ、いじりながらっ、
奥までぐちやぐちやに突いてやる、からなっ！」

「はあ、んあっ、お前ばかりイキまくってっ、俺まだイケてないんだからっ……
付き合ってくれ、よっ……！」

※主人公「も、イケないいつ」

「中はうねって、イク気満々って感じだけどなあッ！
ほらっ、突き上げるたびっ！ 物欲しそうにっ、締め付けてきてるっ……！」

「ん、おおっ、ヤバ……気持ちいいっ……！
はあ、ああ、全部っ、ぴったりハマってるって感じた……」

「やっぱり俺たちっ、体の相性も抜群なんだなっ……」

「可愛くてスケベなお前の顔も見られたしっ、
クリも子宮口もいじめられんの大好きってこともわかったしっ……！
今日は最高だっ……！」

「ん、くっ……ああ、チンポ膨れて、きたっ……
なあ、このまま一番奥にぶちまけていいんだよなっ？」

※主人公「いい、ですっ」

「ん？ 聞こえないって。 どうせならおねだり聞かせて？」

『子宮にトクトク注ぎ込んでください』って、
エロい声で腰振りながらおねだりしてっ……！」

※主人公「子宮にトクトク注ぎ込んでくださいっ！」

「うっあ！ すげ、くっ……んおおっ、チンポにキたっ……！」

「ああ、最高っ！ めちゃくちゃ好きっ…… あ、出るっ！
くっ、ん、あ、イクっ！ イクイクイク！ あ、ああああっ！」

「はあ、ふっ、ん……はあ、はあッ、
中につ、たっぷり注げたな。ん、くっ……まだ、中うねってんの？」

「すげ……ん、はあっ、ああ……すっ、よっぱど精子大好きなんだな……
ほしがりなところめっちゃくちゃ可愛い」

「またいっぱいじめてあげるから、楽しみにしとけよ。こっち向いて」

※主人公「ん」

「口、開けて……キスしよ」

「ん、ふっ、ちゅ……好きすぎてヤバイ……
もう、お前なこと絶対手放せないんだけどっ……ん、ちゅく、ちゅっちゅ」

「はあ、ふっ……愛してる」

【トラック4】

タイトル…さあ？酔って覚えてないな…

場所…裕太の家（朝）

※翌朝。ベッドで目を覚ます主人公。

※体を起こす主人公。

「ん、…あれ？ もう朝……？」

ふあ……ん……おはよ。…よく眠れた？」

※主人公「う、うん」

「あれ？ …どしたの、そんな顔赤くして」

※主人公「昨夜のこと覚えてないの？」

「昨日の夜？ うーん……エッチしたのはなんとなく覚えてるんだけど、何したかはぼんやりしてて……悪い。

何か嫌なこととかしなかった？」

※主人公「何もしてないよ。だいじょぶ」

「そう？ ならいいんだけど……
ん、いつベッドに入ったのかもよく覚えてないってヤバイよなあ」

「外で飲むより安全だからって、ウチで飲んでもらったのに。
酒の飲み方を教えるべき俺が酔いつぶれるって……だめだな。」

「本当にごめん…… 二日酔いとか無い？ 体調、大丈夫そう？」

「俺は飲みすぎると気分悪くなったり、
次の日も頭痛かったりしちゃうんだけど。…お前は平気？」

※主人公「うん、大丈夫だよ」

「そっか。テーブルに並んでる缶は……俺が飲んだわけじゃない、か。」

「初めてであれだけ飲めるなんて……俺よりはるかに酒強いのかな。
でも、飲んでも体調に異変がなければよかったよ」

※主人公「ちよつと、体は痛いけど」

「え、体痛いつて……どうした？ 酔って転んだりとか？」

※主人公「う、ううん！ 大丈夫！ なんでもないの。お風呂入ってくる」

「そっか？ なんでもないならいいんだけど……ん、風呂行つといで。それで、さ。もしよければなんだけど——」

「今日、このあと出かけないか？
もし予定がなければ、だけど……
久しぶりにデートするのもいいかなって……どう？」

※主人公「うん！」

「そんなに喜んでくれるんだ？
あーもう、マジで可愛……あ、いや、なんでもない」

※主人公「何？ 聞きたい」

「なんだよ、今日ずいぶん甘えただな……ダメ、言わない。
ほら、早く風呂入って来な。」

「焦らなくても大丈夫だから……どこ行くか考えといて。
その間に朝ご飯用意しておくから。」

「な？ ほら、行つてらっしゃい」

※主人公「わかった！」

「可愛かった……あの顔、また見られるといいけど」